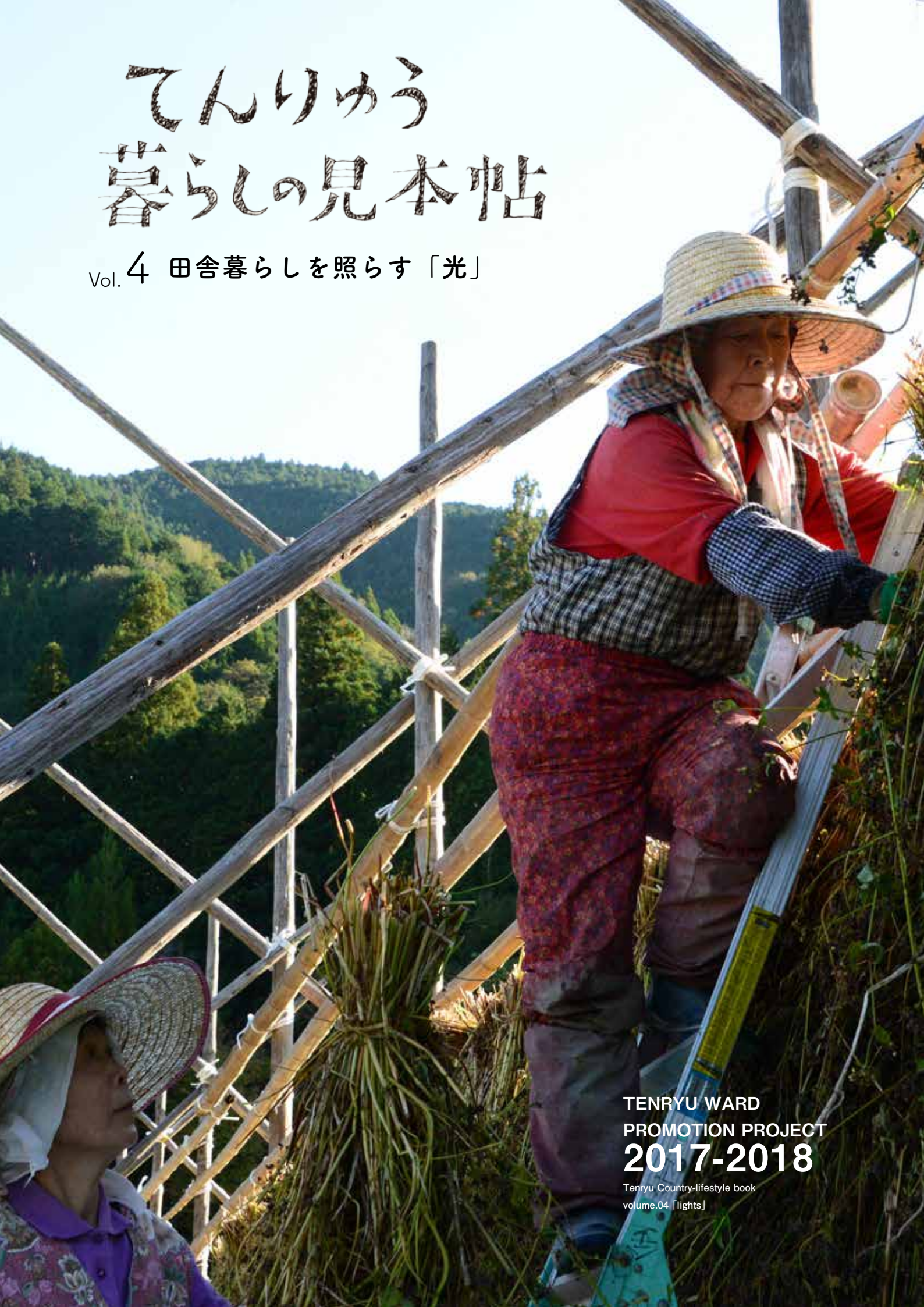
てんりゅう暮らしの見本帖

Vol.4 田舎暮らしを照らす「光」



TENRYU WARD
PROMOTION PROJECT
2017-2018

Tenryu Country-lifestyle book
volume.04「lights」

暮らしが見える。感じる体温(ぬくもり)。

てんりゅうプラス

Tenryu + Plus

浜松市天竜区

てんりゅう 暮らしの見本帖

Vol. 4 田舎暮らしを照らす「光」

contents

暮らしのインタビュー

Page_04 月の光に魅せられた人たち
Page_06 地域を輝かせる小さな花
Page_08 秋葉常夜燈の光
Page_10 輝く伝統食
Page_12 暮らしを次代へ〝年中行事・まつりごと〟
Page_14 歴史が光る町の案内人
Page_16 ナイター照明の光
Page_18 収穫を待つヘッドライトの光
Page_20 脚光を浴びる町
Page_22 山奥の希望の光

暮らしの見本帖エリアマップ
Mihoncho Area Map

浜松市公式 HP にて公開中

暮らしカタログ・暮らし方ログ
「てんりゅう暮らしの見本帖」

うっすらと暗い雲に覆われた山あいから、ぼんやりと照らされる月明かり。

満月に近いその月は、時折見え隠れしながら、灰色のキャンバスに幻想的で柔らかな光を映し出す。観客の「想い」に誘われながら。

秋の風物詩

静寂が広がる船明（ふなぎら）ダム湖畔に次々と人が集まってくる。中には座布団などの敷物を持っている人や、夕飯時とあってお弁当を持参している人も。

ゆったりと寝そべり、くつろいだ様子の愛犬連れのご家族もちらほら。

ここは天竜ボート場。毎年、全国高等学校選抜ボート大会が行われ、ボートの聖地とも言われる場所。階段をそのまま利用した野外の観覧席。見つめる視線の先には、コスモスやすすきを大竹に挿して飾られた特設ステージ。奥には山や森林が織りなす自然のカーテンといったところだろうか。ステージのスポットライトから漏れる光が、観客の笑顔をほのかに照らす。

今は「月」の地名を持つ、月島（つきしま）自治会地域の秋の風物詩「観月会」のミニライブ。地域内外の人々が一年に一度集う大切な行事。

月でお月見

月の地名は南北朝時代に楠（くすのき）氏の家臣、鈴木左京之進によって名付けられたと伝えられていて、この地域を発展させていきたいという願いが込められているという。

そんな素敵な地名にちなんで、月島自治会では、昭和61年当時の若連が地域活性化事業の一端として「ムーンライト・コンサート」を始めた。

暮らしが見える。感じる体温。

Tenryu + Plus

形は変わっても、想いだけは引き継ぎたい。

田舎暮らしを照らす〝光〟case.1「月の光に魅せられた人たち」

10回までは若連が中心となっていたが、地域の高齢化に伴い、若連が解散。その後は地域の婦人部が引き継いだが、27回目の開催を最後にコンサートは幕を閉じた。

35世帯ほどの小さな集落。しかし、ファイナルコンサートには、700人もの人々が駆けつけた。

救世主あらわる

ムーンライト・コンサートが終了してからおよそ3年。地域内外から復活に対する熱望が沢山寄せられたが、高齢化が続く月島自治会には負担が大きいため、何とかできないものかと地域住民は思い悩んでいた。

そんな時、転機が訪れた。

「前の仕事をリタイアしたばかりで、時間に余裕があったからね」そう言って溝口玄（げん）さんは冗談ぽく笑う。湖畔の家のイベントを手掛けることとなった溝口さん。その一つが観月会であった。

▲船明ダム湖畔で微笑む溝口さん

「ムーンライト・コンサートには、何度か足を運んだことがあるよ」

元校長先生で、地元で生まれ育った溝口さん自身もまた、ムーンライト・コンサートの終了を惜しむ一人だった。

「コンサートの復活にはやっぱり思い入れがあったね」と、懐かしそうに語る。しかし、復活にはいくつかの問題があった。何より、一夜だけの復活では意味がない。「何とかして続けたい！」その強い想いで観月会の準備を進めていった。

まずは、名前を変えてみた。

「ムーンライト・コンサートのように〝コンサート〟というと、大掛かりになってしまうから〝ミニライブ〟に変更したんだ」そうして、これまでのプロの演奏家ではなく、地元で活躍している音楽愛好家のライブとなった。

「知っている人が前に出ているのがいいとみんな言うんだよ。形は変わっても〝想い〟だけは引き継ぎたい」

穏やかな人柄の中にも熱い心意気が溢れ出す。そんな溝口さんが連絡調整係となり、湖畔の家、天竜ボート場、道の駅「花桃（はなもも）の里」に、地元の企業や月島自治会も合わせ、地域一丸となって「観月会」を開催することとなった。

「お祭りは強制的なところがあるけど〝観月会〟は違うんだよね」

観月会は地元の祭典よりも盛り上がるという。観月会に対する地域の意気込みが、救世主を得てさらに強くなったようだ。

月が束ねる皆の心

第一回の観月会にはおよそ150人の人々が集まり結果は上々だったが、金銭的には厳しかった。

「このままではいけない！」

そう考えた溝口さんが二年目にとった秘策が、観客も一緒に観月会を盛り上げていく方法。つまり「募金方式」だった。

この方法が成功するかどうかは、当日までわからない。全くの未知数であった。

そして迎えた二年目の観月会当日。

午前中は雨天。中止が懸念される中、長く地域に住んでいる人は、雲の流れを見て大丈夫だと呟いた。心強い一言に、溝口さんたちスタッフに安堵の声が広がり、士気が上がる。

辺りは既に暗くなり始めた夕方、花桃の里が配布していた月見饅頭100個も順調に減り、およそ130人が集まってくれた。「募金箱」も少しずつ重くなっていく。あとは「お月様」が出てくれることを祈るばかりだ。

薄暗い雲に覆われたまま観月会はスタートした。心地良い調べが響き渡り、人々の心を癒してもどこか満たされない。みんなの願いはただ一つ。

「早く〝お月様〟が見たい！」

観月会が中盤にさしかかった頃、歓喜の声が湧き上がる。待ちに待った「お月様」のお出ましである。それは、月の光がそこに居合わせたみんなの心をひとつに束ねた瞬間だった。

月が導く未来への想い

観月会の締めくくりに「来年も来てくれますか？」と司会者が観客に問うと「勿論！」というやりとりが恒例となっていた。

観月会に訪れた130人との約束を果たすためにも、ムーンライト・コンサートから数えて30周年と言える次回開催に向けて、準備に余念がないに違いない。

そう思って話を振ると、溝口さんはあっけらかんと「30周年だからといって、特別なことは考えていない」と笑顔で答える。溝口さんにとっては、30周年はただの30分の1回に過ぎないようだ。

それよりも先の40年、50年と繋がって行く未来を考えているからだろう。

高齢化の波が今後も押し寄せても、溝口さんのような人がいる限り、地域への思いは、月の導きとともに未来へと繋がっていく。

9月下旬、佐久間町浦川地区を車で通ると、どのくらいの広さであろうか、サッカーコート2面ほどの畑で、白い小さなそばの花が、真っ赤な彼岸花と競演しているかのように咲き誇り、朝露に太陽の光を浴びキラキラと光り輝いていた。

白い小さな花

この畑でそば栽培をしているのが、佐久間町の県道水窪羽ケ庄佐久間線沿いにある北条峠で「そば処北条峠」を経営している野田やまびこ会の人たちだ。

お店を開いたのは平成2年、この地域は古くから各家庭でそばの栽培をしていたが、自家消費が主で、そばを提供するお店も無かった。地域の活性化を目的に、当時の佐久間町の協力もあり女性たちが立ち上がり、開店させた。当初は、お店ですべて提供できるまでの収穫量はなく、県外からそばの実を購入し、そばを提供していた。

当時、佐久間町では「そばの里づくり事業」として遊休農地を活用して、そば栽培を推進していた。そこへ野田やまびこ会に白刃の矢が立ち、平成8年から遊休農地でのそば栽培が始まった。

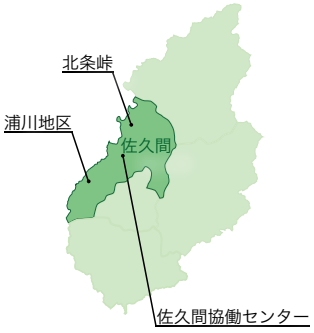
今ではこの畑以外にも町内での栽培を拡大し、お店で提供するそばは〝ほぼ佐久間町産〟と、野田やまびこ会の代表を務める鎌倉亀代さんは少し自慢げに言う。確かに今の時代において、国産で、しかも地元産なんて、素晴らしいと思う。

地域の情熱

この畑でそばの栽培に取り組む鎌倉さん。後日取材を申し込むために電話をすると、二つ返事で許可が出た。

暮らしが見える。感じる体温。

Tenryu + Plus



上は85歳、下は63歳 そばで地域を元気に

田舎暮らしを照らす〝光〟case.2「地域を輝かせる小さな花」

電話の向こうでは何やら騒がしい。その日は台風と秋雨の合間を縫って、あのそば畑でそば刈をしている真っ最中とのこと。今から取材へ向かうことを鎌倉さんに伝え、天竜区役所から車でおよそ70分、秋晴れの中、足早に車を畑へと走らせた。

あの畑一面、白い花で埋め尽くされていた畑が、大げさかもしれないが黄金色に見えた。車から降り、カメラの準備をしていると、「今日は暑いねぇ」と遠くから話しかけられ、振り返ると道端の畑からヤッケを着て、麦わら帽子姿のお母さんが、額の汗を拭っていた。

▲▼はざ掛けをする鎌倉さん

畑には同じくヤッケを着て、農作業帽子を被ったお母さんたちがもくもくと作業をしていた。

取材の準備をして畑に降りると、最初にあいさつをしてくれたお母さんは3mほどの高さはある「はざ」に登り、手際よくわらで束ねられたそばを掛けている。これは〝はざがけ〟と呼ばれるそば作りの手法だ。

帽子を覗きこむようにしてみると、なんと鎌倉さんだった。手を休めることなく一心に作業へと取り組むその額には、秋の日差しを受け、光るものが滴り落ちてくる。

こう言っては失礼かもしれないが、畑で作業している人は皆、お母さんばかり。恐る恐る鎌倉さんに会員の年齢を聞くと、ためらいなく「下は63歳」畑の一角を差し「あそこで作業している人が一番上で85歳」と教えてくれた。「昭和58年にやまびこ会を作ってから、もう35年経つからねぇ、みんな歳をとったよ」と笑いながら教えてくれた。

鎌倉さんに今年のそばの出来を尋ねると、「今年は最高」と声を張り答え、12月になればそば処北条峠で新そばを食べられるからおいでねと言われ、図々しくも取材をお願いした。

12月のある日

北条峠にチラチラと雪が舞う中、作業小屋では、そばの乾燥作業の真っ最中。雪に濡れないように慌ててそばの撤収をしている人や、営業日に備えて仕込みをしている人が、慣れた手つきでもくもくと作業をしていた。

鎌倉さんは「脱穀したてだからこれだけでも良い香りがするよ」と、玄そばから脱穀したばかりのそばを準備して見せてくれた。鼻を近づけると、そばのやさしい香りがした。

▲そば刈りをする野田やまびこ会の会員の皆さん

すぐにそばを打つから待っててと言って、こね鉢のそば粉に水を回し手際良く、練り上げていく。

めん棒に巻き付けたそばを小刻みにトントントンと、のし板に打ち付けながら伸ばしていくのが北条峠流と言う。鎌倉さんと会話をしているうちに切り揃えられたそばが出来上がっていく。

未来への輝き

新そばのそば粉はうっすらと緑色をしており、茹で上がり笊に盛られたそばは何とも言えない輝きを放っていた。

その輝きは、単なる打ち立てではなく、山間部でたくさんの太陽の光を浴び、野田やまびこ会のお母さんたちが、額からたくさん汗を流し、作業した愛情の賜物かと思った。

いや、そばがこの地で暮らす人を輝かせるために光っているのかもしれない。

こんな光景をいつまでも残したいと思いつつ、最後はおいしい新そばを辛めの汁に少しつけ、腹いっぱいになるまで啜り続けた。

九里先にある橋

天竜区春野町領家坂下地区。天竜川の支流、気田川へそそぐ栃川に架かる九里橋。火防の信仰がある秋葉山の麓にあって、掛川宿から九里（およそ36キロメートル）浜松宿からも九里の距離にある事から九里橋と名が付いたと言われる橋。

今なら自動車で1時間ほどの距離を、昔は、何日もかけて旅人は歩いた。九里橋の傍らには古い常夜燈があり、当時の面影を残している。

歩いて旅をした頃の坂下宿は、山を越え、渡船などで川を渡り、秋葉山まで残りわずかの場所。かつては多くの旅籠があり旅人を迎えていた。

私たちにとっても旅はとても楽しいもの。

景色を楽しみ、美味しい物を食べ、土産物を見たり買ったりして「今日はどんな宿だろうか」と心が躍る。

古くから旅籠が軒を連ねていた急峻な坂。

時代の流れとともに旅籠は無くなり、参詣客が通った道も、今では石畳の風情ある道となった。

最近では、旅籠の名残を活かして古民家を改装したカフェがオープンした。その昔旅人をもてなしていた茶店を思わせるその光景は、時代にあわせて変化しながら、昔と変わらず、秋葉山とともにある人々の暮らしそのものだ。

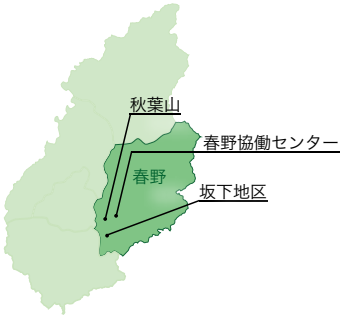
だいだい色

秋葉詣が盛んな頃、安全祈願などの想いを込めて、宿場や街道に常夜燈が建てられた。昔はろうそくの灯、今は電球の灯と変化しつつも地元に愛され、その形を残している。

九里橋のある坂下地区では夜になると、常夜燈に明かりが灯る。その光はだいだい色で、とても

暮らしが見える。感じる体温。

Tenryu + Plus



秋葉山と、ともに暮らす

田舎暮らしを照らす〝光〟case.3「秋葉常夜燈の光」

画になる。ついシャッターを切りたくなってしまった。

昔、旅館を営んでいた〝仲屋〟のおかみさんに「写真撮らせてくださいね」と声を掛けた。

「火まつり行くだかね。寒いで気を付けてよ」と、おかみさんが笑う。そう、今日は12月16日。秋葉の火まつりの日だ。

火まつりが終わると寒くなる

毎年12月15日・16日の2日間は秋葉の火まつり。五穀豊穣や無病息災を願い行われるこの行事は多くの観光客や参詣者で賑わいをみせる。

秋葉の火まつりで有名な「弓の舞・剣の舞・火の舞」や「火わたり」などは深夜に行われる行事。北風が厳しく手がかじかむほどの寒さの中、皆まつりの様子を熱心に見物している。

「火まつりが終わると寒くなる」

地元の人はそう言うそうで、本格的な冬の到来を感じさせる行事だ。

「昔、合格祈願に来たよ」

火まつりでは火を扱うこともあり、地元消防団も協力している。消防団員の森本剛司さんは春野育ち。子供の頃の話を聞かせてくれた。

「旧春野町立南中学校の生徒は火まつりの日、受験の合格を願って、クラスの仲間と登山したよ」

「真っ暗な登山道をみんなと登って、途中で夜景が見えて、ワクワクしたね。めったにできない事をできるのが楽しくて…今でも覚えているよ」

「今は学校が統合してしまったから登ってないかなぁ。今の子供たちにも教えたいね」と、他の消防団員と懐かしむ。

大人の引率も無く子供たちだけで、真夜中に山道を登る。

今では考えられないけれど、少し前までやっていた事。ほんの小さな冒険は子供たちの心を成長させ、郷土愛を育むのではないか。

実際に地元に残り消防団員として活躍している彼の存在が、何よりの証拠だと思った。

今の私たちは子供たちにそんな体験をさせてあげられるだろうか。記憶に残る出来事は、そこに居たい、住みたい気持ちにつながる。その想いが地域を育み、人をつないできたのだと実感した。

▲秋葉寺

▲秋葉神社

▲坂下地区

「粟」と書くと、今どきの人たちの中には読めない人もいるかもしれない。

「アワ」といえば五穀の一つで、かつて庶民がよく食べていた雑穀であり、最近では健康食として女性たちに人気を博している。

河原で見かける「ネコジャラシ」にも似た穂先に成る、小ぶりな実は食べることができ、独特の風味と豊富な栄養素を含むのが特徴の一つだ。

米や小麦などに押されて鳴りを潜めているものの、れっきとした伝統食であるアワ。このアワを用いて、地域おこしをしている人たちがいると聞き、天竜区水窪町を訪れた。

里山の原風景

時節は、天高く馬肥ゆる秋。紅葉が山を彩り、こうべを垂れた稲穂が田んぼを彩っている。

町中の商店街を抜け、長尾と呼ばれる集落へ足を運ぶと、道脇の畑から楽しそうな声が。

畑を見やると、そこに広がっていたのは一面金色の景色。たわわに実った穂先を見て稲穂と見間違えたが、それはアワだった。

太陽の光を浴びて黄金色に輝く穂先はずっしりと重く、その身を風に任せている。

そんなアワを、数人の人たちが刈り入れていた。

鎌を手におしゃべりしながら、小気味よく収穫している。楽しげな様子に惹かれ、話を聞かせてもらった。

アワの収穫を行っていたのは、水窪で活動するNPO法人「こいね水窪」の皆さん。今回は代表を務める中政俊さんにお話を伺うことができた。

「アワなんて、いまどきあまり食べないでしょ？」そう語る中さんはしかし、収穫したアワを大事そうに抱えて見せてくれた。

米や小麦に比べて非常に小さなその粒は、この地域で古くから親しまれてきた、在来のもの。余計な手は一切加えていないそうだ。

十人十色の地域おこし

なぜ、この小さなアワの粒に地域おこしへの願いを託したのか、ふと疑問に思ったことを聞いてみると、愛嬌のある笑みを浮かべながら、中さんはその理由を語ってくれた。

「人が少しずつ減って、みんな思ってたんだよ、何かしないといけんねって、活動を始めたきっかけはいくつかあるけど、一番は〝地域をなんとかしたい〟っていう思いを持った衆らが集まって、始めたんだ」

こいね水窪のメンバーは、地域に住む人たち。商店街に店を構える人、建設業を営む人…。まさしく十人十色。個性的な面々が集まったと、中さんも苦笑いだ。

共通しているのは「故郷を元気にしたい」という熱い思い。最初は、水窪の在来種である「水窪じゃがた」の栽培から活動を始めた。平成26年の3月…春先のことである。

収穫を終えると、同年8月にはじゃがいもをメーンテーマにしたイベントを開催し、新たな賑わいを生み出すことに成功した。

アワ、育てます

「さあ、次は何から始めようか…って考えていたら、10月ごろに市内のある菓子メーカーから話が来た。水窪の雑穀を使って菓子を作らせてくれませんか…ってね」

菓子メーカーへの口添えは、こいね水窪の活動を知った地元住民からだったという。

「水窪じゃ昔から米の代わりにアワを育ててた。でも最近じゃあ作ってるのは数軒程度でね。うまくやれれば、新しい何かを生み出すんじゃないかって思って、じゃあ協力しましょうってことで、アワの栽培を決めたわけ」

苦難の連続

「それからは大変だったよ。水窪で30年以上もアワを育てる地元の人に頼み込んで〝ネコアシアワ〟っていう在来種の種を分けてもらって、育て方とか、いろいろご指導いただいてね」

アワの栽培については、メンバーの中にも経験者はいなかった。地元の方の協力は不可欠で、やっとのことで説き伏せてアワの種を譲り受け、休耕地の開拓に取り掛かった。

その時のことについて中さんは「やることばかりで苦労したもんだ」と、苦い顔で語ってくれた。

「とにかく畑を使えるように戻すだけでひと苦労。なんせ十数年使ってなかった畑だから、石も転がってるし、土もカチカチ。だけども、そこはいろんな衆が集まった良さというか、建築関係の仕事をしてるメンバーがユンボ（※油圧式ショベルカー）を使って、あっという間に耕してくれた」

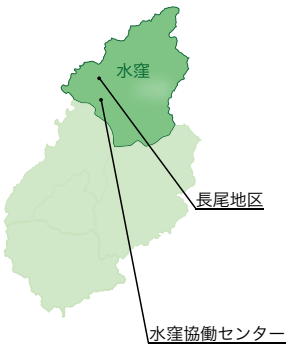
やっとのことで畑を耕し、譲り受けた種を植えてからも、中さんたちの苦難は続いた。

特に鳥獣被害は深刻で、ようやく芽吹いた新芽をシカに食べられてしまったり、実ったアワを小鳥についばまれたりと、日夜頭を悩ませた。

シカの侵入を防ぐ電気柵を設置し、鳥よけの防護ネットを張り巡らせ…。平日・休日を問わず、交代で畑を見守る日々が続く。

「あっという間に秋が来て、いよいよ収穫の時

暮らしが見える。感じる体温。
Tenryu + Plus



アワの一粒にも想いがこもるもんだ

田舎暮らしを照らす〝光〟case.4「輝く伝統食」

期を迎えた時は、苦労した分、喜びもひとしおだった」と、中さんは笑みを浮かべた。

収穫は15キログラム。菓子メーカーに納品を済ませた残りは今でも残してあるとのことで、中さんはパックに入ったアワを見せてくれた。

「反省点はいくつかあるけど、初年度でこれだけ収穫できたってことは、次はもっと収穫できるってこと。だから畑を変えてみたり、機械を入れたり色々工夫した。すると、二年目の収穫量はグーンと伸びて、120キログラムも収穫できた」

勢いづく〝雑穀の里〟

こいね水窪の活動は、地元水窪にとどまらず、多くの人たちに知れ渡ることになる。新聞にも取り上げられ「雑穀の里」と銘打って紹介された。

また、アワの収穫ツアーが開催され、県内外から多くの参加者が水窪を訪れたほか、水窪小学校の児童たちによる収穫・脱穀体験が催されるなど、児童が地元の伝統、文化に触れるきっかけ作りにも繋がった。

「やる気のある衆が頑張ってくれたおかげだ」

嬉しそうに語る中さんは、次のステップに向けての意気込みを教えてくれた。

「アワの事業が軌道に乗れば、利益が生まれて、働く場所ができる。働き口ができりゃあ、活気が生まれる。若い衆も来るかもしれん。そうなりゃ、この町にとっても良いことだろう?」

だから、続ける。そう語る中さんの瞳は、静かに燃えている。そんな中さんだからこそ、十人十色のメンバーたちもついていくのだろう。

水窪の伝統食「アワ」。

地元の熱意に照らされて、小粒なその実が今、再び輝きを放っている。

▲アワの収穫に取り組む中さん

代々引き継いだ生活の一部分を大切にしている、そんな暮らしが天竜区にはある。

時代は変わっても、変わらないもの、伝え守っていくもの…新しい年を迎えるための、新しい年の朝陽を受けるための、暮らしの様式…

龍山町の片桐さんを訪ねた。

輝いていた、あの頃

「私が森林組合に就職した昭和30年代後半はね、300石の木を切れば、当時の役場の課長さんの2年分の給料になったからね」（※1石＝およそ0・18㎥）

そう話すのは、龍山町で暮らす片桐和彦さん。龍山で生まれてから77年間ずっと、ここで暮らしている。

「あの頃、中学の同級生は100人以上いたなぁ。龍山中学は大嶺（おおみね）と瀬尻（せじり）にそれぞれ教室があったからね。この集落にも多くの人が住んでいてさ。山も、人も、みんな元気で、活気があったね。

でも今じゃ、山には〝光〟が当たらず、集落では回覧板を回すのもひと苦労。隣家までの距離がどんどん遠くなってね…一つ空き家になったと思ったら、また、あそこも空き家に…。

でもね、これも時代だから仕方がない。今じゃぁ、会社とかどこか勤めに行かなきゃ暮らしていけない。

子どもが学校へ行ける〝距離〟を考えなきゃいけない。生活しやすい環境を整えることは必要な時代だからね」

時代が変わった今、地域の実情を見つめる片桐さんの表情が、少し寂しそうに見えた。

平成29年3月現在、龍山町の人口は600人を切った。小学校は横山小学校に、中学校は光が丘中学校に統合して〝龍山〟と名の付く学校は、今はない。

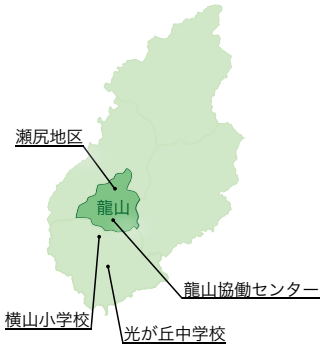
変わっても、変わらないもの

「集落に暮らす人数は減っても、時代は変わっても、地域には変わらないものがあるんです」片桐さんは続けた。その代表的な二つのことを教えてくれた。

一つ目は常会。月末には、集落の全21世帯が集まって会合を開く。

自治会長さんから、市からの依頼事項の伝達があったり地域の困りごとの相談をしたり、また、世間話をしたりして集落の人たちとのコミュニ

▲年中のまつりごとに使う道具を見せてくれる片桐さん



暮らしが見える。感じる体温。

Tenryu + Plus

ここでまた、新しい年を迎える

田舎暮らしを照らす〝光〟case.5「暮らしを次代へ〝年中行事・まつりごと〟」

ケーションを図る場となっている。

こんなやりとりもみられる。一人暮らし世帯や高齢者世帯が増えてきたこの集落。欠席が続く人がいると、「○○さんを最近見ないが」「そういや、最近、足が悪くなってね」などと話題になる。

すると、ある人が「それじゃぁ、ワシがちょっと○○して手伝ってやらっか」となる。共助のつながりである。常会が、集落の「見守り体制」としての大きな役割を担っているのである。

二つ目は年中を通したまつりごと。

例えば、1月には新年の顔合わせ会、2月には山の神のお日待ち、3月にはお彼岸、6月には津島様のお日待…と、集落では1月からの行事が立て続けに行われる。

「昔から、みんなで集まってやってるんです」

若水汲み。それは一年の最初にやる事

龍山で生まれ育った片桐さんだからこそ、欠かさず行うことがある。それは…。

「1年のいちばん最初にやること。それは〝若水汲み〟だね」元日の朝は毎年早起きして、家の近くの清水から水を汲む。そしてそれを使ってお茶を沸かしたり、雑煮を作ったりするという。

「昔は火も起こしたんだよね、ガスなんかなかったから。そうそう、ガスが各家庭に入ってきたのは昭和40年代、テレビは30年代。昔は何でも自分たちでやっていたんだよね。世の中、便利になった…でもね、忘れたくないものってあるんだよね」

そういって、片桐さんは、家の奥の方から何やらいろいろと取り出してきた。

「これが、ひしゃく、これが桶、盆、それから…」見せてくれた道具の数々。これらを使って一年中の片桐家のまつりごとを一人で行っているという。1月から12月までのまつりごとを詳しく、そして分かりやすく教えてくれた。

1月4日の朝には「山の始め」と言ってね、御洗米や果物なんかを木の根っこに置いて、木を切る真似をするんだ。にゅうぎ（新木：下写真参照）を作り始めるのもこのとき。

6日は「女の年取り」と言って、正月が終わってほっと一息の日だね。7日は七草粥を作って一年の無病息災を願って食べる。この日に門松を寝かす（倒す）んだ。それから…。

ふんふんと感心しながら12月まで聞いていくと、「おやじの見よう見真似だよ」と、片桐さんはほほ笑みながら付け加えた。

伝えていくこと、伝えてもらうこと

後悔していることがあるという。

「おやじに、もっとしっかり聞いておけばよかった。これはどんな意味があるのか、何のためにやっているのか、ってね」

片桐さんは、文献などで一生けんめい調べたのだそうだ。

「若いとき、働いているときには明日のことがいちばん大事でさ。山の始め？女の年取り？全然興味もなかったし。おやじが何か教え伝えようと声を掛けていたのかもしれないけど、その頃はただうるさいなぁとしか思わなかったんだろうね」

ちょっと嫌味な言葉を投げてみた。

息子さんにまつりごとの意味を伝えているのか、と。すると片桐さんは笑った。

「それは、分かるよ。聞くのは面倒だって。若いうちはそうだもん。知りたくなったら知ればいい。でもね、聞いてくれるときもあるから、その時にしっかり伝えられることは伝えていくよ」

守ること

片桐家で代々続けている年中のまつりごと。片桐家の風習、文化である。

聞くと、毎月1日には、家中50ヵ所に榊をおまつりしているし、毎月何かしらのまつりごとがあり、準備から考えると多くの時間と労力、そして、それぞれに技が必要だ。

「今は省いているのもあるけどね。これからも、やれるようにやっていくよ。片桐流でね」片桐さんは笑って簡単そうに言うが、片桐家の「まつりごと」を守っていくことは、誰にでもできることではない。

誰がために、陽は当たる

新しい年が始まる。

すでに12月25日の「花迎え」を済ませた。歯の健康を願う「歯がため」用に秋から準備してきた干し柿も大丈夫だ。庭に作った門松に、もうすぐ初日が当たろうとしている。

片桐さんの願いはひとつ。

「今年も、来年も、再来年もずっと。自分も、家族も、集落のみんなも、ここで新しい年を迎え、すこやかに暮らせるように」

▲家中の飾り付け（毎月１日）

▲鬼おどし（節分）

▲にゅうぎ（小正月）

お揃いの蛍光グリーンのパーカを着て、二俣の歴史を教えてくれる人たちがいる。そんな情報を聞きつけて、さっそくその人たちが主催する散策会「紅葉の二俣・鳥羽山両城址を訪ねて」に参加することを決めた。

当日、集合場所である二俣協働センターに行くと、朝日に照らされた蛍光パーカを着た人たちが受付をしてくれた。その背中には「天竜ふるさとガイドの会」とあった。

隠れた歴史に光をあてる人たち

天竜ふるさとガイドの会は、平成14年に発足。現在は会員19人で活動しており、年に4回、主催の散策会を開いている。また、そのほかにも、協働センターで講座を行ったり、観光客から依頼を受けて二俣のまちをガイドしたりと、精力的に活動している。会長を務める瀧謙乙（たきけんいち）さんはガイドをはじめて今年で10年目になるそうだ。

この日、散策会に参加したのは40人ほど。二俣協働センターから、二俣城跡や鳥羽山城跡を巡るおよそ6キロメートルのコースをガイドの会が案内する。

参加者に話を聞くと、初参加の人よりも、リピーターが多い。

「瀧さんたちのガイドが楽しみで参加してるんだ。今日はどんな話が聞けるのかなってね」と、一人の男性が教えてくれた。

毎年行っているのに、どんな話が聞けるか楽しみとはどういう事なのだろうか。

散策会にリピーターが多い理由

目的地までの道のりを歩く参加者からは「ここには昔、何が建っていたんですか」「この石碑は何と書いてあるの」「鳥居の形が変に感じるなぁ」など様々な疑問が飛び交う。それらの疑問一つ一つにうれしそうに答える会員の皆さん。

しかし、全ての質問に答えるのは、大変ではないのだろうか。

「正直言って大変ですが、仲間の手助けもありますし、逆にお客さんから教えていただくこともあります。そんな交流も楽しいですね。できるだけお答えできるように、勉強会で学習して備えていますよ。散策会にリピーターが多いのは、二俣の自然・歴史が魅力的であるのと、地元住民の人柄の良さだと思います」

瀧さんはリピーターが多い要因を2つあげていたが、3つ目に「天竜ふるさとガイドの会の皆さんの人柄」を付け加えておくことにしたい。

蛍光パーカの真相

散策会の途中、思い切って、瀧さんになぜお揃いの蛍光パーカを着ているのか、尋ねてみた。

「これはね、天竜の美しい森林をイメージしてるんですよ」と小さく笑いながら教えてくれた。その返答に納得していると、他の会員の方から、「私は意味なんて考えたことないですよ」と一言。パーカに込められた意味は、会員一人一人が自分で考えるものなのかもしれない。

次は瀧さんから「私たちが被っているこの帽子についている鳥の名前は知っていますか」と質問された。天竜ふるさとガイドの皆さんはお揃いの帽子も被っている。そこには、美しい鳥の絵。

「これはキセキレイという鳥の絵。しかも、ただのキセキレイの絵じゃないんですよ」と、どこか誇らしげな瀧さん。

「キセキレイは旧天竜市の〝市の鳥〟で、この絵は旧天竜市の下水道の蓋に描かれていたものなんです」

こんな細かいところまで、天竜の歴史が散りばめられているなんで、時間の流れに消えてしまいそうな記憶に光をあてることに余念がない。素直に気持ちを伝えると、瀧さんは照れたように笑っていた。

いま、歴史が光る町

大河ドラマの影響からか、平成29年は天竜ふるさとガイドの会は大忙しだったそうだ。

「今年の夏は、東京方面からツアーを組んで、600人くらいお客さんが見えて大変でした」と、〝苦労した〟というわりには、うれしそうな顔で瀧さんは呟いた。

さらに、平成30年には「二俣城跡及び鳥羽山城跡」が国史跡に指定された。

「非常に喜ばしいことで感激しています。私たちガイドも観光客の皆さんの期待を裏切らないように、より一層の研さんに努めたいと思います」と、歴史が輝き出した天竜のガイドに、これまで以上に意欲を見せる瀧さん。

ガイドの高齢化は進むが、今日も天竜ふるさとガイドの会は、天竜の隠れた歴史に光を当て続けている。なぜなら、天竜ふるさとガイドの会の皆さんには夢があるから。

「天竜に住む人たちが、ふるさとの歴史・文化を知ることで、ふるさとに誇りと愛情を持って〝お国自慢〟をしたくなるようになってほしいのです」

こちらが教えてもらうこともある そういう交流も楽しい

田舎暮らしを照らす〝光〟case.6「歴史が光る町の案内人」

▲参加者からの質問一つ一つに丁寧に答える瀧さん

12月下旬、冷たい空気と澄み渡る星空を、夕焼けのような色彩で、辺り一面を鮮やかに照らしている、ナイター照明の光。

その光に吸い込まれるように訪れた先は、静岡県立浜松湖北（こほく）高等学校佐久間分校のグラウンド。

気迫のこもった声があちらこちらに飛び交い、〝カキーン〟と星空めがけて打ち上げられた白球は、あたかも待ち合わせの約束をしていたかのように、グローブの中へ音をたてて収まる。

グラウンドでは、野球部員たちが夜間練習に身を投じていた。

佐久間地域の小さな野球部

佐久間分校野球部は、1年生4人、2年生8人の部員と1年生のマネージャー1人で構成された小さなチーム。

部員はほとんど佐久間地域で暮らしている。

練習時間は朝7時から始業時間まで自主活動。放課後は、佐久間の山あいに陽が沈んだ後も19時30分まで、汗と土にまみれて毎日練習をしている。

グラウンドに立つと、部員一人一人が「こんばんは！」と白い息交じりの太い声を張り上げ、被っていた帽子をとり、挨拶をしてくれた。

グラウンドを見渡していると、女子生徒がそっと駆け寄り、温かいお茶を差し出してくれた。

冷たい空気の中冷えきっていた両手は、その瞬間、息を吹き返したかのように温まっていく。

監督の想い

ベンチの方へ案内されると、若い男性が近づいてきた。学生にしては少し大人っぽい男性。どうやらこの人がコーチのようだ。

暮らしが見える。感じる体温。

Tenryu + Plus

地域の願いと夢を照らす ナイター照明の光

田舎暮らしを照らす〝光〟case.7「ナイター照明の光」

コーチはこの小さな野球チームについて細かく話をしてくれた。

聞けば、練習試合は市内の高校ではなく、愛知県の高校と行っているとのこと。愛知県との県境に接しているこの地域ならではだ。

コーチとの会話も終わりを迎える頃、グラウンドの遥か向うから、ただならぬオーラをまとい颯爽と歩いてくる一人の男性。

この人が監督だということはすぐに分かった。ガッチリした体格は、ジャンパー越しからでも十分に見て分かる。

「こいつら、本当に野球が好きなんですよ」監督はこの言葉を皮切りに、チームに対する想いを語ってくれた。

「山で育っているこの子たちは、素直で本当にいい子たち。そんなこの子たちだからこそ、勝たせてやりたい。夏の大会では、バックスクリーンに向かって思い切り校歌を歌わせてあげたい。それが指導者である自分の使命であり、責任だと思っている」そんな監督の熱意と勝利への執着心は、この小さなチームの可能性を今まで以上に引き出してくれているのだろう。

とにかく勝ちたい!!

練習の合間にキャプテンの山田勘太（かんた）さんから話を聞くことができた。話して感じたのは、監督が言う通り、本当に素直な子供たちだということ。

彼がチームをまとめているんだと思うと、話を聞くのがワクワクしてきた。中学から野球部で活躍している根っからの野球好きらしい。

「部員のほとんどが佐久間出身だから、昔から顔見知りで仲良し。この関係は野球をするのに良くもあり、悪くもある。お互いに言いたいことを厳しく言い合える雰囲気が、今このチームに一番必要な事だと思っています」

気づくと、笑顔だったキャプテンの顔が真剣な表情に変わっている。チームの事をよく理解し、考えていると感心させられた。

休日も練習に励んでいる部員たちだが、夏休みの時間が空いた時などは友達と川遊びに行き、中には釣りを楽しんでいる部員もいるという。

キャプテンは、地元の子供からお年寄りまでおよそ60人が集まり昼食を食べる「ふれあい食事会」という地域の行事に参加している。

「今の自分があるのは、僕を温かく見守ってくれる地域の方々のおかげです」そして続けた。

「今後はとにかく夏の大会で勝利を掴みたい。その勝利の喜びを、先輩や地域の方々、そして監督にプレゼントしたい。それが日頃お世話になっている方々への恩返しです」と、キャプテンが語ったその瞬間、取材をしていた私の胸に、熱い何かが込み上げてくるのを感じた。

幼さが残る笑顔の裏に隠された実力と統率力は、きっと計り知れないほどの力強さを持っているのだろう。

遠くで一人黙々とボールの手入れをしている女子生徒…先程温かいお茶を差し出してくれたマネージャーだ。

野球をやっていた兄に憧れて、他の部活動よりも野球部のマネージャーを選んだとのこと。彼女はキラキラした目で心に秘めたチームへの想いを語ってくれた。

「佐久間地域を盛り上げるためにも、まずは1勝して欲しい！　誰よりも私が一番近くでみんなを支えているから」手のひらをギュッと握りしめた彼女の言葉には、チームや地域への愛情がギッシリと込められていた。

▲キャプテンを務める２年生の山田さん

地域の願いと夢を乗せて

夢を追うことに遠ざかっていた自分。ふと気づけば、彼らの姿にいつかの自分を重ねていた。

真剣なまなざしに写りこむナイター照明の光は「まず1勝！」よりもさらにその先の勝利を照らしているようだった。

一人一人が同じ夢に向かって走り続けている野球部。どうか彼らの進む先に、光が差し込んでくれますようにと心から願う。

ナイター照明の光の中、無我夢中で追い掛ける白球は、地域の願いと彼らが思い描く夢を乗せ、山あいの星空へ弧を描き続けている。

―午前2時。長蔵寺地区にある真っ暗闇の畑にポツン、ポツンとわずかな灯りがともる。見えるのはヘッドライトに照らされた手元のみ。光源に集まってくる虫との格闘の中、トウモロコシの収穫が始まった。

収穫をしているのは春野耕作隊。生まれも育ちも春野の若手農家3人が中心となり、都市部の大学生と連携・協力し活動している団体だ。

春野が大好きだから、現状をただ傍観しているのではなく、出来ることからやっていこうと耕作放棄地の再生を始めた。

茶木を抜根し、整地、施肥（せひ）、そしてやっと種をまくことができる。その取り組みも3年目を迎え、これまでに再生された耕作放棄地は、およそ6000立法メートルにもなっている。

春野耕作隊代表の伊澤光興（いざわみつおき）さんは思い返す。

「農業で春野を元気にしたい。毎日のように仲間とそんな話ばかりしていた」

あるとき偶然にも声が掛かり、静岡文化芸術大学中山間地域支援サークル「LAIVoC（ライボック）」と知り合うことができた。なかなか踏み出せなかった自分たちの想いが、それをきっかけに一歩前に踏み出せることになった。

―午前4時。辺りはだんだんと明るくなってくる。夜明けも近い。

今回販売する分の収穫は、ほぼ終了。さあ、これから直売を始めるまでに外皮をむき、袋詰め作業を終えなければいけない。

春野で作られた野菜を春野で消費しよう。今はよそから買っているものを、俺たちが作ろう。それから町外にも出て行って、春野の名前をたくさんの人に知ってもらおう。

農業で春野を元気にしたいという想いを持った仲間が集まって、同じ目的で活動ができる。やりたいと考えていたことが実行に移せるチャンスが来て「待ってました！」という感じだったと伊澤さん。他の2人も「すぐにやりたい、って思った」「仲間ができてうれしかった」と当時を振り返る。

発足当初は、農家と大学生の十数人でスタートしたが、今は高校生や小・中学生、一般ボランティアなどが加わり、地域内外の幅広い世代が参加するようになった。なかでも、春野耕作隊の主力となっている大学生は、地域の想いに共感して、今では様々な場面で活躍している。

軽トラックの荷台に載せられるサイズの直売所は、木のぬくもりが感じられ、なおかつスタイリッシュに。また、販売用ビニール袋に貼るロゴマーク「はるのたべるの」は親しみやすい図案でかわいらしいピンク色に。これらは、大学生がデザインし制作したものだ。

―午前9時。直売の開始時刻。早くも夏の日差しが直売所を照らす。

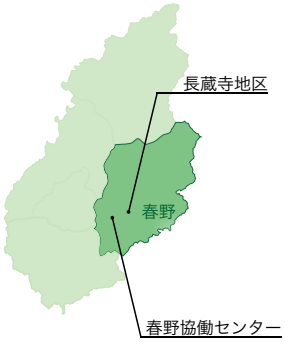
運び込まれた朝採りトウモロコシが、学生たちの笑顔と一緒に手渡されていく。私たちが育てた春野の野菜をぜひ食べてほしい。

大学生が春野耕作隊に参加した理由は、人それぞれ。自然が好きだから、ボランティアがしてみたかったから、中山間地域に興味があったから…。

「俺が学生だったら、絶対こんな活動に参加してない。なんで来てくれるかわからない」と伊澤さんは首をかしげる。

暮らしが見える。感じる体温。

Tenryu + Plus



できることからやっていこう だって、春野が好きだから

田舎暮らしを照らす〝光〟case.8「収穫を待つヘッドライトの光」

「活動の中で、農家さん、サークルメンバー、地域の方々と関わっているうちに、人っていいなって、人と何かをする楽しさに惹かれて参加しているんだと思う。その楽しさで、なぜか春野に足が向いてしまうというか…」と一人の大学生は話してくれた。

楽しく来てくれているんだろうかと不安に思っていた伊澤さん。少しホッとするが、しかし、不安なことはまだある。春野耕作隊の活動が、春野を盛り上げることに繋がっているのかどうか。

「今年のトウモロコシはいいデキっすよ」

春野の空気と水に育まれた自信の一品。鮮度も味も、どこにも劣らない。そして、春野耕作隊の想いも込められている。

7月に毎週末行った町内直売イベントでは、苦戦を強いられたが、アイデアを出し合って、およそ4000本を売り切ることができた。

—もうすぐ正午。さらに強い日差しが降り注ぐ。直売は終了し、片付けも済んでひと休み。深夜からの作業で疲労困憊。しかし、充実感を存分に味わって、皆、満足げな表情だ。

信じてやっていくしかない。伊澤さんはそう言い切る。農業から頑張ることで春野を一つに、大家族のようにつながって、みんなで春野をよくしていこう。

～春野を耕し　春野を育て　春野で生きる～

若者たちの間で流行している〝コスプレ〟様々なキャラクターを忠実に再現した仮装は、日本だけでなく世界からも注目を集めている。

そんな〝コスプレ〟を全力で楽しむ祭りがあると聞き、天竜区最北端の町、水窪町を訪れた。

仮装する商店街

町の中央に位置する水窪商店街。

普段は穏やかな時間が流れるそこへ足を踏み入れると、私の目に飛び込んできたのは、装いをがらりと変えた商店街の姿だった。

メインストリートの両脇には露店が立ち並び、地元の若連が祭り囃子を奏でて練り歩く。

道を行き交う人々は、祭り衣装の人や、懐かしいアニメのキャラクターのコスプレなど、様々な格好の人ばかりで思わず目を奪われた。

非日常の風景に我を忘れていると、賑やかな笑い声とともに大がかりな出し物が曳かれてきた。

なにやら巨大な戦車のような出し物。聞くところによると、仮装劇のための舞台だという。

賑わう人混みをかき分け、商店街を移動していた出し物が動きを止めると、数十人もの役者たちが衣装を整えたり、なにやら道具を持ち出したりと、にわかに慌ただしくなる。

そして始まる仮装劇。役者たちがところどころアドリブを加えながら、軽快に進んでいく劇は、思わず笑ってしまう面白さがあった。

「水窪祭りは、仮装劇が目玉の一つ」と、水窪出身の者から聞いていたが、これほどのクオリティとは思ってもみなかった。

仮装劇が終わると、足早にその場を去る役者たち。他の参加者による次の劇が控えているのだ。

先ほどの劇に魅了されてしまった私は、話を伺うべく彼らの背中を追いかけた。

祭り好きな住民

話を聞かせてくれたのは、先ほど仮装劇を演じていた竜戸連の連長を務める坂口能達さん。

竜戸連のシンボルマーク〝獅子〟の刺繍が施されたハンチング帽が似合う坂口さんは、祭りについて嬉しそうに語ってくれた。

「水窪の祭りっていうのは、特別だよね。他の地域にはない楽しみというか、特別な仮装がある」

そう言って坂口さんは、様々な仮装で祭りを楽しむ竜戸連の住民たちを見やる。その視線には、どこか誇らしげな感情が込められていた。

「皆、祭り好きな衆ばっかりでね。何をやるにも〝よし、やるか〟って、動き出しが早いんだ。積極的っていうか、みんなで楽しもうって感じ」

聞けば、先ほどの仮装劇も、皆で意見を出し合って作り上げたという。

今回のテーマは〝アカンバチ〟地元でよく見かけるスズメバチを題材にしていて、十数年も温められてきた超大作。坂口さん自身も「ここまで大掛かりになるとは思わんかった」と、苦笑いだ。

祭りの準備は暮らしの一部

「参加してるどこの組も同じだろうけど、祭りってのは絆を保ってくれる場だ。皆で集ってまとまって一つの仮装を作り上げる。飲み食いしながらやるのが良い。台詞合わせをして、コミュニケーションをとりながらわいわい賑やかに。とにかく、楽しくやってるから続くんだろうよ」

シーズンになると、生活の一部になっている。楽しそうに語る坂口さんだったが、今後の祭りについて話が及ぶと、顔色がにわかに暗くなった。

聞くと、普段に比べて格段に賑やかな祭りの時期でさえも、徐々に人は減っているという。

「昔に比べてさ、やっぱり人は減って来てるんだよな。屋台の引き回しとか、仮装だって大変になる。だからこそ、若い衆が帰ってくるように、水窪に注目してもらうというか〝脚光〟を浴びせられるようにせにゃならんよな」

脚光を浴びる町

地元の皆さんが、工夫を凝らした仮装をしたり、劇を行ったりと、全力で祭りに取り組んでいる背景には、水窪への大きな愛があった。

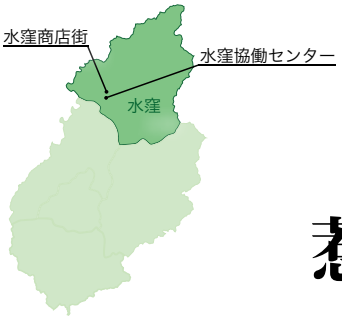
もちろん、楽しむために全力なのだろう。だが、その裏側にはいつも、隠しきれない地元愛が、若者たちに、再び水窪を見てほしい、帰って来てほしい…という熱い思いがあるのだろう。

「とにかく、盛り上がっているとこを見せたい。仮装は人目を引くし、他にないイベントになる。カメラを持ったお客さんが来て、仮装の写真なり屋台の写真なり撮って帰る。そしたら、田舎にもこんな祭りがあるのかって、注目を集められる」

坂口さんは商店街を見つめながら、熱く語ってくれた。その目線の先では、若連が横笛を吹きながら練り歩いている。子供たちがお面をかぶり、楽しそうにはしゃいでいる。今も昔も変わらない、ハレの日の風景が、そこにはあった。

「長く喋っちまったけど、結局、仮装ってのは地域の楽しみみたいなもんだし、よその衆を引き寄せる魅力の一つなんだろう。後につなげるためにも、守らにゃいかんね」

浜松市の最北端にありながら、脚光を浴びる町。そこには祭り好きな住民たちの、熱い思いがある。



暮らしが見える。感じる体温。

Tenryu + Plus

北遠随一の面白さ
惹きつけられる〝仮装〟の魅力

田舎暮らしを照らす〝光〟case.9「脚光を浴びる町」

▲仮装の魅力を語る坂口さん

平成28年に運営を再開したキャンプ場「龍山秘密村」。それは龍山町白倉（しらくら）地区にある。

標高が高いため夏は涼しく、夜には美しい星空が楽しめる。豊かな自然に囲まれた敷地内には小川が流れ、カフェやプール、コテージのほかクライミングウォールもあり、多くの親子連れなどで賑わいを見せている。

龍山秘密村の村長、川道光司（かわみちこうじ）さんを訪ねた。

キャンプ場再生を目指し龍山に移住

川道さんは浜松山里いきいき応援隊として平成28年4月に龍山町に移住。

龍山秘密村の村長に就任し、一時閉鎖となったキャンプ場の再生に取り組んできた。

川道さんに龍山に初めて来たときの第一印象を訪ねると「何もないところ」と答えてくれた。

▲多くの人が駆けつけた龍山秘密村の開村式

それでも一瞬で龍山を気に入ったという。

もともとアウトドアが好きで経験も豊富な川道さん。キャンプ場を運営することが夢だったということで、秘密村の話を聞いてわずか数か月で龍山に移住。

古くなった施設を修繕しながらキャンプ場の営業を再開した。

龍山にきてキャンプ場を運営することについて、移住当時の思いを訪ねた。

「地域に人を呼ぶことっていいことかどうかわからないじゃないですか。よそから人が来て迷惑と思っちゃう人もいるかもしれない。果たしてそれが、まして地域おこしのためと言いながら自分の利益のために人に迷惑をかけちゃったとしたら本末転倒だと思って…。

最初に何人かにそうやって話をしたときに〝ぜひぜひ呼んでほしい〟って地元のおばちゃんたちが言うわけですよ。でも呼んでみたら実は…なんてのがあったらいやだなぁと思っていたんです。

でも今、地域のおばちゃんたちと会うと〝川道さんがやってくれて賑やかになって、人が増えて良かった〟と言ってくれる。そして秘密村の運営にもいろいろ協力してくれて、充実した活動ができています」と川道さんは当初の不安な気持ちを話してくれた。

活動を通してできた多くの仲間

キャンプ場の最盛期といえば7～8月の夏休み。秘密村もお客さんで賑わい、川道さんも自宅に帰ることはほとんどないという。そこで苦労したことを聞いてみた。

「家に帰れないのは苦労じゃなくて、仕事って行き詰ったり挫折したりみたいのが苦労かもしれないけど、そういうのは無かったですね」

そう語る川道さん。キャンプ場の運営に対する熱意を感じた。

そして次のように続けた。

「それでも一番苦労したのは〝人〟ですね。人手が足りないとか、人の確保。でも多くの人が協力してくれました。　予想外だったのは同年代の地域の人たちと一緒にやれたこと。普段は龍山に住んでないけど、自分が頑張ってるからということで、帰ってきて協力してくれる。本当にありがたいです」

逆にうれしかったことについて聞いてみた。

「まずはリピーターのお客さんが増えてくれたのがうれしいですね。それとお母さん方から〝子供が「絶対秘密村に行きたい」っていう…〟そんなことを言われたとき。キャンプ場なんていくらでもあるじゃないですか。秘密村の自然環境はすばらしいけど、それ以外に特別なものは無いと思っていた。でもそれを特別って思ってくれるっていうことは、何か付加価値があるんだろうなって感じて、そういう反応がうれしいですね。そして浜松の中心部のイベントに出店したときも、そういったお客さんや子供たちが〝村長～〟って、わざわざ会いに来てくれるんです。ただの管理人だと思っていたのに」

秘密村の活動が人と人の交流を生み、仲間ができ、また活動が広がる。キャンプ場の再生に取り組んで2年、その成果は大きい。

よそ者だったから気付けたこと

そして話は続いた。

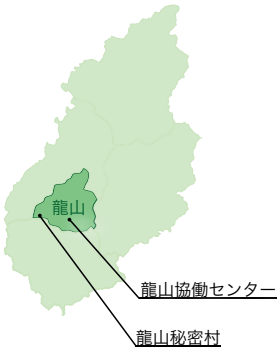
「龍山には特別な観光地とか大自然、特別な文化があるわけでもなく、その自然と暮らし以上の

暮らしが見える。感じる体温。

Tenryu + Plus

人と人のつながりを大切に
山の暮らしを伝える仕事

田舎暮らしを照らす〝光〟case.10「山奥の希望の光」



ものはないですよね。秘密村に来た人が、僕を通してそれを好きになってくれればと思ってやってきたけど、それが響いたわけじゃないですか。子供たちにもお母さん方にも。自分は〝山の暮らしを伝える仕事〟というか、そういうことができた。それは住んでいる人だと逆にできないかもしれない。よそ者だから気づくこともあるし、できることもあったと思います」と語ってくれた。

さらなる発展を目指して

秘密村では幼稚園から小学校低学年の子供たちを対象にイベントを開いている。

そこで指導にあたる川道さん。

「子供たちが自然の中ではしゃぐ姿が最高。子供らしく当たり前の姿だけど、その笑顔がキラキラ輝いて見えます。これからのキーワードは〝こども〟ですね」と、今後の取り組みに意欲を見せた。

再開から2年、当初の目標を大きく越える成果を出した龍山秘密村。さらなる利用者拡大を目指し施設の充実化を図るとともに、様々なイベントを計画している。

子供たちの笑顔に〝希望の光〟を見出した川道村長のさらなる活躍に期待が高まる。

▲自らも子供たちと一緒に楽しむ川道さん（左）

天ぷら小話　あとがきにかえて

いつからだろうか。
里山のパノラマに心を動かされていたのは。
町並みを照らす陽光が、山々からにじみ出るその瞬間に。

いつからだろうか。
雨上がりの土臭いあぜ道を心地よく感じたのは。
革靴越しに感じる土の柔らかさ。木漏れ日。草花に輝く雫に。

いつからだろうか。
夕暮れの山々に、ポツポツと輝く灯火（ともしび）を探していたのは。
山あいの町に灯るあかり。家々の暮らしを照らす光。

僕たちが忘れていたもの。日々の中に溶け込む、暖かな光。
明るむ山肌には、そこに住む人たちの暮らしがある。

一筋の光明を辿れば、そこに広がる豊かな風景。
ここにしかない、ちょっとプラスな話。

「暮らしが見える。感じる体温（ぬくもり）」。
それが僕たちのてんりゅうプラス。

暮らしが見える。感じる体温（ぬくもり）
Tenryu + Plus

〒431-3392　浜松市天竜区二俣町二俣 481 番地　　浜松市天竜区役所区振興課（☎ 053-922-0011　FAX053-922-0049）　E-mail/tn-shinko@city.hamamatsu.shizuoka.jp

平成 30 年 3 月